



令和4年 2月 28日 発行

学校だより 3月 376号

横浜市立六つ川西小学校 (TEL) 742-6301 (FAX) 743-2394

URL <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/mutsukawanishi/>

「令和3年度 若きアスリートに学ぶ」

校長

今年度は、夏の五輪が東京で、冬の五輪が北京で開催され、二つのオリンピックが近隣で開催される珍しい年となりました。

残念ながらオリンピック観戦は中止となり、大会での選手たちの活躍を身近に感じることが、難しいだろうと思っていました。

しかし、スケートボードで女子ストリートの西谷もみじ選手が13歳で日本史上最年少の金メダリストになった事や、女子パークの決勝で金メダル候補であった14歳の岡本みすぐ選手が失敗してしまい、泣いていたところを他国のライバル選手に肩車をされ笑顔になっていたことを朝会で話したところ、年齢の近い若いアスリートの活躍を身近に感じて喜ぶ子どもたちの声を聞くことができました。

そして、冬の北京オリンピックでも、同じような風景をスノーボードに見ることができました。

女子ビッグエアの決勝で日本選手団最年少17歳のメダリスト村瀬 ここも選手の活躍や、女子では誰も挑戦したことのない大技に挑んだ岩淵 れいら選手の失敗にもライバル選手が拍手を贈り、駆け寄ってハグをしていた姿がとても印象に残っています。

国や順位を超えて若い選手同士がたたえあい、勝ち負けだけにとらわれることなく自由に自分を表現する姿は、過去のオリンピックでは、あまり見ることができなかった姿ではないかと思えます。これらの競技で共通して大切にされるのは「独自性」や「創造性」。つまり「自分らしさ」ともいえるかもしれません。誰にもできない技をいかに自分らしく、かっこよく決めるかが大切であって、「速さ」や「高さ」そして「強さ」だけを競わないところが似ているところなのかもしれません。

オリンピックに参加しているアスリートたちは、コロナ禍でも厳しい練習を乗り越え、国の代表としてオリンピックに出場しています。その先には、きっとメダルという目標もあるのだと思います。

それでも、ライバル選手の素晴らしい滑りには、勝ち負けに関係なく「クールだね」、「かっこいい」と讚えあう姿がありました。

本当に素晴らしいことだなあと感じます。

今年度を振り返ってみると、六つ川西小学校の子どもたちにも、このアスリートと同じように行事や日々の生活の中で一人ひとりが自分らしくかがやき、友だちの頑張りを認め合い、響き合っている姿に多く出会うことができました。

教育でめざす力は、これまで同様「一人ひとりが、自分のよさや可能性に気づき、自分の周りの人たちを価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていこうとする力」です。

新しい生活様式に基づく学校生活や教育活動の中でもこれらのことが達成できるよう、皆さんとともに進めてまいりましょう。

これからもみんなで力を合わせて現状に立ち向かい、前を向き、新たな希望をもってしっかりと歩んでいきたいと思えます。

これまで、

そして、これからも
かわらぬご支援、ご協力に
心より感謝申し上げます。

